

大阪商業大学学術情報リポジトリ

寺社祭礼を中心とした露店市の今日的形態－東京・名古屋・京都・大阪の露店調査をもとに－

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2020-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 明尾, 圭造, AKEO, Keizo メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/877

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



寺社祭礼を中心とした露店市の今日的形態

—東京・名古屋・京都・大阪の露店調査をもとに—

明 尾 圭 造

はじめに

物心がついた頃から、祖父に連れられて四天王寺や生駒の宝山寺へ月参りに行くのが楽しみだった。子供ながらに露店を覗く楽しさを覚えてしまったわけだが、信仰心が無かった訳ではない。行けば必ず、本堂で手を合わせ、様々な願い事をする参拝者の一員でもあった。ただ、幾度となく祖父に付いて行ったのは、纏わりつく線香の香りとともに露店で扱われる種々雑多な商品の面白さ、境内に響く啖呵売¹⁾や雑踏での喧騒に心踊る思いがしたからだ。

また、所狭しと並べられた用途のわからない品々、同じ商品でも通りを隔てると数倍の価格差がある不条理、値札がつかない商品に如何に声掛けをするか、それこそが露店の醍醐味でもあり、そうした非日常の様相を包み込む境内が、幼心に強烈な印象を残したと言えよう。

少年の目からすれば、寺社参詣と露店市は不可分なものだったが、そうした感覚（聖俗綯い交ぜの世界）が多くの人々を祭礼や露店市へ向かわせる大きな要因でもあろう。

学年が上がるに連れて、自然と足が向かなくなったが、大学で歴史を専攻するようになってから、懐かしさもあって再び訪れるようになった。今でも四天王寺の彼岸の中日（後述）には必ず出向いている。

改めて、寺社の祭礼にともなう露店市を俯瞰した時、老若男女が参集する露店市は、商品経済の原初的な場所であるとともに祝祭と娯楽を享受する社会の縮図とも言える場所と考えるようになった。

本稿では、時代を超えて今日に続く露店市（寺社祭礼を中心に）の実態を紹介し、先人の祭礼に寄せる思いや今日の意義についても言及したい。具体的には、東京（富岡八幡宮・花園神社・東京国際フォーラム会場前広場）、名古屋（大須観音骨董市）、京都（北野天満宮天神市・東寺弘法市）、大阪（四天王寺大師会）など都市部における露店市の実地調査を紹介する。一方で、新たな露店空間を創出する大江戸骨董市（東京国際フォーラム会場）を取り上げ

ることにより、歴史的な露店市の変遷とともに新たな展開事例についても考えてみたい。

1、祭礼と縁日について

古来、定期市の代表的なものとして六斎市が知られている。六斎または六斎日というのは、もともと仏教用語である。仏教では、毎月8・14・15・23・29・30日の6日は、鬼神が勢力を得て人命を奪うというので、とくにこれらの日には、斎（法会の時の食事）を行い、布施聴法して、悪鬼の跳梁を除いたという。よって六斎日の殺生を禁じたのだが、この六斎日謹慎という慣行は、次第に公家・武家から庶民一般に行われるようになり、月6回と定められた民間の行事は、六斎念佛・六斎市と呼ばれるようになる。やがて、仏会に附属して開かれた仏教的要因より、経済的要因が求められるようになり全国に各種の定期市が立つようになった。

一方で、仏縁に伴う縁日とは「神仏が生まれたり、霊験を示したりするなどして、この世に、その御姿を現した日」を記念するもので、8日（薬師）・14日（普賢菩薩）・15日（阿弥陀仏）・18日（観世音菩薩）・21日（弘法大師・聖徳太子）・25日（天神）などがある。関西では、21日の東寺弘法市・四天王寺大師会、25日の北野天満宮天神市が有名であろう。

大阪では、社寺を中心とした祭礼や縁日²⁾が一年中どこかで賑やかに行われているが、縁起もかつぐし、季節の変わり目ごとに細かいしきりもある。何より商都大阪と言われるだけに商売に関係したものが多い。

戦前までの大阪の祭りは、1月10日の今宮神社の十日戎から始まる。3月の堀江木花踊、4月のあしべ踊り、新町の浪花踊が花の盛りにくりひろげられる。四天王寺の「お彼岸さん」も有名である。夏になると、7月9日の生国魂神社、御霊、高津、坐摩、陶器の各神社の祭りがあるが、7月25日、天満天神祭の賑わいは今も昔も変わらない。この間、7月15日の開港記念日、23日の水都祭などは全市的に行われた。また、7月31日の堺市の大魚夜市も夏の宵をいどる。夏祭りは7月31日、8月1日の住吉まつり（住吉神社）で終止符をうつ。秋祭りは四天王寺千日詣、大鳥神社祭、百舌鳥八幡祭などに始まる。秋彼岸会、玉祖神社祭、住吉神社の宝の市神事、水無瀬宝祭、そして12月14日の石津の火渡りによって主な行事が終わるのであるが、その間にあって薬の神祭「神農様」が薬問屋の道修町中心に行われており、菊人形や観楓など秋の行事もある。今では行われなくなった祭礼も多いが、その多くが大阪の四季に彩りを添えていたと言っても過言ではない。

2、大阪の夜店について

大阪では縁日とともに忘れてならないのが夜店である。日時と場所を定めた定期的な催しで、古く江戸時代から続く夜の風物詩であった。まずは、『大坂繁花風土記全』により文化11年（1814）に開かれていた夜店を列記してみよう。

順慶町	東は堺筋より西はよこ堀迄 新町橋を渡り西へ門のうち道者横町の辺迄
日本橋南詰	二ツ井戸松屋町辺 内本町松屋町南北
天満十丁目通	裏門辺より濱まで 堂島櫻橋 同蛭橋南側 是等順慶町の十ヶ一なれ共、毎夜出る所なればしるす
平野町通御霊辺	心斎橋より西横堀まで其日限 朔日 六日 八日 十一日 十二日 十六日 十八日 廿一日 廿六日 廿八日 己上日数十日なり
常安橋筋	八日やくし 九日こんぴら 十日同じ 十二日やくし 十八日くわん音 廿八日ふ動 己上日数六日なり
内平野町神明	朔日 六日 十一日 十六日 廿一日 廿六日 己上六斎也
玉造稻荷	鳥居門前南北 十五日 廿七日 右兩日也

なかでも平野町の夜店は有名で、戦前まで継続して開催されており、多くの回想録が今日に残っている。例えば、本学の商業史博物館の根幹をなす佐古慶三収集文書³⁾の蒐集譚が興味深い。

あの頃（大正10年）私は夜店を飛び歩いてました。東京にいる時も、帰ってきたら必ず行ってましたけど。平野町の夜店、一六の夜店ですね。一と六のつく日に夜店がでた。天満の老松町にも行った。それと難波の溝之側、あそこは二七でした。ひょんなもんが出るんです。とくに平野町はたくさん出た。夕方の四時か五時に行く。南木芳太郎さんとしょっちゅう一緒になる。南木さんはあの頃「上方」をやる前で、道修町の薬屋につとめてはりましたから平野町のすぐ近くですが。私が行ったら、もう本をよってはります。私もよりますね。するとその頃の和本屋の大將は鹿田はんで、鹿田松雲堂ですね。その番頭をやってた中尾の熊やんと、手代の沖森とが後で

待ってるんです。こっち二人がよるのんを。よってしまって、もう今日は終わりやというたら、「よろしいか」というて、自分たちが抜くんですね。それが四時から五時。ぼちぼちお客さんが来て、日が暮れたら裸電球に灯を入れるわけです。

筒井之隆《聞き書き》佐古慶三傳

明治以降、旧幕の頃の書類（町方文書など）や古典籍は無用の長物として廃棄され、巡り巡って平野町の夜店などに出品された。佐古先生など好学の士に蒐集された史料（古文書）は幸いで、残りは表具の下張り等に使われた。また、左官業を営んだ祖父からは「目方で文書を買って短冊状に切って壁材のつなぎ「蒔（すさ）」に使うんや」と聞いたことがある。もっぱら、祖父は河内八尾のお逮夜市で左官や大工道具の古手を探しに行っていたそうだが、ときおり手に入ったという古文書の意外な使われ方に興味を覚えたものだ。

平野町の夜店について、大阪を代表する洋画家の小出櫓重も作品が売れなくて、新聞や雑誌に随筆を書いて過ごした時期がある。昭和5年に大阪朝日新聞に寄せた記事を見てみよう。

さて大阪は昔から商業の中心地であり、大體において中心地帯は大問屋が軒を並べてゐるためか夜になると各戸共に戸を締切つて街路は全く暗やみとなつて静まり返つてしまふ傾向がある。晩に店を開くものは小商人としてむしろ輕蔑され勝ちだつた。先ず大阪の町は暗いのが特長だといつていゝかも知れない。したがつて大阪の夜店は暗黒の街路を一、六、三、八、といつた日に氏神を中心としてその附近を急激に明るくして楽しもうとする傾向がある。私の子供時代の大阪の夜の暗さは徳川時代の暗さをそのままに備えていた。平野町は御霊神社をめぐる古来有名な夜店である。ここは道もゆるやかだし、電車も巡查もゐない。危険と苦痛がないことは何よりだつた。そして第一に屋台の様子がその店の個性を出して思ひ思ひの意匠を凝らしてゐるところは歩行者によき慰めを與へるのである。そして香具師と和本屋と古道具屋と狐まんぢう、どびん焼、くらま煮屋が昔そのままの顔で並んでゐた。私が十幾年以前に初めてガラス絵を買つたのもこの平野町だつた。末期的な役者の似顔絵と、人形を抱く娘の像の二つを発見して妙に執着を持つた。私は多分一枚五十銭で買つたと記憶する。それが病付きでたうたうガラス絵とは妙な仲となつてしまつた。（…中略）

小出櫓重「大阪」

小出特有の小品ガラス絵の起点が夜店にあると思うと興味深い。島之内に歴代続いた薬屋の「ぼんぼん」が娯楽としての夜店を存分に活写したもののだが、光と闇の対比で夜店をとらえる感覚は流石に画家の視点と言えよう。

最後に新町も含めた夜の風情を記した回想（秦孝治郎）を紹介しておこう。

ここは船場の夜店だけあって上品であり、逍遥する客種がぐんといいい。骨董や道具類に至っては数十円と値を呼ぶ品も売れている。…京町堀となると町続きであるのに、客足は一段と低下し、商われる商品も一段下がる。…さらに南に移って、新町通りの夜店になると、附近に新町遊郭があるだけに、客種も大柄な浴衣や帯を緩く締めた芸者たちの姿などが混じって、ぐんと色めいて見える。この夜店は、文化文政の頃の記録によると、「夜店に名高きは順慶町にして暮より四つ時までは十町余両側みな商人なり」と記されている。古い歴史の順慶町の夜店を承継したものである。ともあれ、平野町の夜店で船場の風格を味わい、大宝町、八幡筋の夜店では島の内の風格を知ることが出来たのである。（…中略）

秦孝治郎著・坂本武人編『露店市・縁日市』

3、露店とその分類について

これら縁日や夜店を彩る露店は「道路とか、広場など、いわゆる露店において移動に便利なように簡単な店を張って、ふり（初現）の客を相手にして、購買心を対象に現金取引によって営業する店の総称」を言い、神農（香具師⁴⁾・協同組合など世話人による組織が管理し、所場代、会費（弁当など）などを徴収して運営されていた。

遠くから見れば光の絵巻物、近く寄ればボロも見える。露店の組織、種類、仕入方から販売法、その商品の安い訳、裏へ廻れば人の知らない苦労もあれば案外なからくりもあるというもの、戦前の露店には以下のとおりの分類⁵⁾があったと言われる。

◎コミセ（図版1）＝小見世、風船、飴屋などのおとなしい店。

◎サンズン（図版2）＝組立て売台の寸法が三尺三寸からきた名という。または、軒下三寸離れた露店の意味もある。静かな口上が普通。

◎コロピ（ピタ）（図版３）＝路面に莫座を敷いて、その上に商品を積み、並べて啖呵・口上の緩急をつけて販売。移動商人の本領。

◎ハボク（図版４）＝葉木で植木商のこと。

◎タカモノ＝仮設小屋の興行、サーカス、見世物小屋の一切。

◎ハジキ＝射的屋

◎ロクマ＝占者。相手の顔色を読み、暗示で引き出し、その迷いに適当に答えてやる。精神的按摩とも言える。

◎大ジメ＝大きく人を集めてやるもの。法律解釈本の販売、薬草売り、波布とマンガースの膏薬売りなど。

◎啖呵売と無音＝バナナや堺包丁など啖呵売と、骨董古本などの無音（ナシオト）。



図版１ コミセ



図版２ サンズン



図版３ コロピ（ピタ）



図版４ ハボク

祖父に連れられて行った四天王寺では、彼岸の中日に見世物小屋や波布（はぶ）とマンガース

寺社祭礼を中心とした露店市の今日的形態

スの膏薬売りなどを見たことがある。現在では、人権上の問題もあり、あえて取り上げられないのだろうが、覗きからくりや蛇女・人間ポンプなどは今も強烈に覚えている。いわゆる大ジメと言われる人ばかりでの口上販売では、輪の中から抜ける人に対して「今、抜けて行ったのは確か指名手配の奴や」と小声で言い、その場を立ち去り難い雰囲気にする群集心理に長けた店主もいた。

また、川の天神さんに対して陸の生国魂さんと言われた生国魂夏祭りでは、枕太鼓の威勢の良さに見惚れ、「コミセ」でりんご飴を買ってもらったり、「ハジキ」と呼ばれる射的屋で大物のプラモデルを狙ったりして夜店をそぞろ歩いたのも懐かしい思い出。

「露店商殺すに刃物はいらぬ、雨の三日も降れば良い」とは、四天王寺で馴染みの露店商が自虐的に言ったものだが、春秋2回の彼岸会（1週間）には必ずと言ってよいほど無情の雨が降る。京都では弘法さんが雨なら天神さんは晴れ、またその逆もあるとは地元の人の言だが、儘ならないのが天候である。急な雨ともなれば「ビタ」と呼ばれる路面に莫塵の露店商は大忙しで恨めしげにお天道さんを睨んでいるが、「コミセ」や「サンズン」などテントの付いた組み立て屋台に一時避難させてもらうのも相身互いの人情というものだろう。

所変われば人情も変わる。祭礼と露店のあり方や周辺地域との関係について、東京、名古屋、京都、大阪の露店事情を見て行きたい。

4、東京の露店(富岡八幡宮・花園神社・大江戸骨董市：東京国際フォーラム会場前広場)

現在、東京では乃木神社古民具骨董市（港区）、靖国神社青空骨董市（千代田区）、花園神社青空骨董市（新宿区）、富岡八幡宮骨董市（江東区）、大江戸骨董市（東京国際フォーラム前広場：千代田区）などで骨董アンティークを中心とした露店市が開催されている。骨董市に限定すれば、東京国際展示場ビックサイト（江東区）の骨董ジャンボリーや東京流通センター（大田区）の平和島全国骨董古民具祭が有名だが、屋内開催ということと寺社の祭礼とは無縁なためここでは取り上げない。

そのなかで、最も活況を呈しているのは大江戸骨董市（後述）ではないだろうか。有楽町駅直近の同会は、寺社の祭礼ではないものの地域に根ざした新たな試みとして注目を集めているからだ。以下、同会も含めて富岡八幡宮、花園神社の開催状況を見て行くこととしたい。

富岡八幡宮

富岡八幡宮は寛永4年（1627）当時永代島と呼ばれていた現在地にご神託により創建された。周辺の砂州一帯を埋め立て、社地と氏子の居住地を開き、総じて六万五百八坪の社有地を得たという。世に「深川の八幡様」と親しまれ、今も昔も変わらぬ信仰を集める「江戸最大の八幡様」である。

現在、地下鉄大江戸・東西線の門前仲町駅に近接し、深川不動尊とともに深川地域の祈りと祭礼の場所として知られている。地域では1日、15日、28日の月例祭（深川不動尊）とともに毎月第1・2日曜日に開催される富岡八幡骨董市が大勢の人で賑わっている。古くは「江戸名所図絵」などにも紹介される富岡八幡宮だが、8月15日を中心に行われる「深川八幡祭り」は日枝神社の山王祭、神田明神の神田祭とともに「江戸三大祭」の一つに数えられている。

平成6年に始まった催しは下町の骨董市（図版5）として参拝者に親しまれている。大通りに面した鳥居をくぐると所狭しと古物骨董を中心とした露店（100店以上）が並んでいる。会の主催者は楽市楽座⁶⁾で、古物許可証を携帯した出店者が、早朝の到着順に出店場所を決めており、開催時間は午前8時から午後3時ごろまでと伺った。

品揃えは骨董というより生活雑貨が多い様に見受けられた。最近では絵はがきや紙もの（摺



図版5 富岡八幡宮本殿前

物・古文書・和本）資料などマニア向けの店舗も増えているようだ。また出店者は関東圏を中心に北陸、東北の他、北欧系の出店者もいるという。さらに、最近では毎月15日と28日に「富岡八幡宮青空市」というフリーマーケットが開かれるなど催しもバラエティーに富んだものとなっている。境内には地元住民をはじめ、関西や海外からの観光客（バスツアー）も多く、飲食店や汁粉屋など門前仲町商店街を巻き込んだ地域おこしも兼ねた催事であると思われた。

花園神社

花園神社は都庁舎をはじめデパートやファッションモールが立ち並ぶ新宿通り、飲食店がひしめく歌舞伎町といった繁華街を擁する新宿の総鎮守として知られる。江戸期は甲州街道の宿駅（内藤新宿）として栄え、岡場所（官許の遊里以外の私娼のいた場所）なども繁盛したとい

寺社祭礼を中心とした露店市の今日的形態

う。その頃は花園稲荷、四ツ谷稲荷、四谷追分稲荷、三光院などと呼ばれたが、明治に稲荷神社、昭和初期の花園稲荷神社を経て昭和41年に花園神社となった。

江戸期を含め、度々火災に見舞われた本社は境内に劇場や見世物、演劇の興行に場所を貸すなど芸能関係者と密接なつながりの中で復興してきた歴史を持つ。境内には芸能浅間神社もあり芸能人の参拝は後をたたない。

近年、椎名林檎のプロモーションビデオ（「歌舞伎町の女王」）に境内が舞台として使われたこともある。

東京メトロや都営新宿線の新宿三丁目駅からは徒歩3分、JR新宿駅からも徒歩圏の好立地である。現在、神社の祭礼行事（5月の例大祭、11月の西の市＝大酉祭）と重ならない限り、毎週日曜日に「青空骨董市」（図版6）が開かれている。毎週開催されているのは珍しく常連客も多いと聞く。営業時間は早朝6時30分ごろから日没までの長丁場だ。出品はアンティーク着物が多いように見受けられたが、木綿の厚子⁷⁾などを扱う専門店もある。印籠、鐔、矢立など単価の高い商品を扱う店は主にディーラー相手の出店と思われた。

巨大ターミナルとして知られる新宿駅に近接するだけあって海外からの参拝者も多く、和洋折衷のアンティークを手にとって楽しめる場所として、隠れた国際交流の場にもなっている。また、都会のオアシスとして、休日の新（宿）ブラの待ち合わせの場所として「青空骨董市」（20店前後が出店）の果たす役割は決して小さいものではないだろう。



図版6 花園神社大鳥居前

大江戸骨董市（東京国際フォーラム会場前広場）

大江戸骨董市は江戸開府400年を記念するイベントとして東京国際フォーラム地上広場（有楽町）で開催（2003年9月以降）されたのが契機となっている。当初、毎月第3日曜日が開催日であったのに対して第1日曜日も付加され今日に至っている。2012年からは代々木公園でも同様の骨董市が不定期で開催されている。いずれも主催は大江戸骨董市実行委員会では運営は（株）クレドによるもの。同会のプロフィールによれば、開催目的は「古き良き物の良さをみつめ直し、日本文化を再発見する機会を提供すること。人々の交流の場・文化芸術の交流の場となる

ことを目的としています」とある。同会の趣旨に賛同し東京国際フォーラムが特別協力を、東京都産業労働局観光部が後援する形をとっている。東京駅にも近く、皇居と銀座の中間地点にある有楽町。その中で国際会議も開かれる東京国際フォーラム地上広場で定期的開催され、日本有数のアウトドア骨董市（約250店が出店）として内外に知られるようになった。

東京国際フォーラムのホール棟とガラス棟の間にある緑あふれるオープンスペース（図版7）が会場となっているのだが、近代的な建造物の中庭で和洋折衷のアンティークを満喫できるのは如何にも高揚感がある。来場者も海外からの観光客だけでなく、休日に訪れた若い家族連れの姿も目立つ。一方で、浮世絵、漆器、木彫に書画、遊具等をはじめデルフト陶器、磁器、アンティーク時計など逸品が目当てのコレクターの期待も裏切らない。まさしく骨董のデパートとも言えよう。調査時にはフランス人研究者の一行に出会ったが「根付」の良いものを探しに来たということであった。ここでは、寺社に見られるような出店にまつわる因習が無いのか、出店者には若い女性が散見された。ある店主に聞いたところでは、会の規約を理解し、その上で1ヶ月前から受付（FAX）が始まるのだという。開催目的に則って古物営業法（古物許可証携帯）や種の保存法（ワシントン条約による象牙販売の禁止）を遵守すること。刀剣、銃砲、猥褻物など公序良俗に反する物品の販売をしないことなどを条件に事務局が定めた場所に出店し、ID（名札）を携帯するというものであった。西洋雑貨を扱う同店主の出店料は半ブース（W1.8×D1.8m）の6,000円^{8）}で、商品は山手線を使ってポストンバックにより自ら手運びしたと言っていた。「机や椅子も事前に申し込めば格安に借りることが出来、雨天による中止なども前日定時の天気予報による決定・中止が明確なことから、気に入って気軽に参加している」ということであった。これに対して、広い面積でテントも備えているような古



図版7 大江戸骨董市
（東京国際フォーラム前広場）

物骨董業者は車両による搬入搬出のため、細かな経路と時間指定があると聞いた。周辺の道路事情を考えると主催者の苦労は並大抵のものではなかろうと思われた。

天候や客の入り具合を見て店舗ごとに撤収時間の違う寺社での露店市に対して、都市部の催事ゆえ、時間は厳格に守られていた。開催時間は一年を通して午前9時から午後4時となっており、午後3時を超えると撤収準備に入る店も多い。4時になると店舗外周にロープがはられ

客は締め出しを食らうわけだが、ロープ越しに最後の値交渉に及ぶ来場者も散見された。

いにしえから続く寺社の祭礼でもなく、2003年以降という新しい試みでもある大江戸骨董市は、首都東京という舞台を最大限に活用した催事と言えよう。近代的都市建築の園庭は開放感があり、急な天候変化に対しては両サイドのフォーラム会場に避難することも出来る。途中、周辺レストランで食事を取ったあと再度巡回することも可能で、その気になれば半日の行楽の場として全く新しい祝祭空間が創出された好例だと思う。

5、名古屋の露店（大須観音骨董市）

大須観音

中京名古屋地区で、最も大きいとされるのが大須観音骨董市である。大須観音（図版8）は真言宗智山派別格本山の寺で本尊は聖観音（大須観音）。寺号は「北野山真福寺寶生院」という。所在地はJR名古屋駅から市営地下鉄東山線と鶴舞線乗り継いで2駅目（大須観音駅）下車すぐの好立地にある。

毎月18日の御本尊聖観音の縁日と28日の月2回、境内で骨董市が開催されているが、朝は5時から午後4時頃まで開催されると伺った。早朝の搬入と聞いて見学に行ったのだが、真夜中の2時、3時ごろから搬入が始まり、それと同時に懐中電灯で商品の品定めをする人がいることには驚いた。午後3時前後には参拝者の様子を見て店舗ごとに撤収の準備を進めている様子だった。

出店者によれば、2回の開催の内、28日の方が店数も多いと聞いた。春秋の大祭では隣接するアーケードの商店街に飲食関係の露店が立つという。また、10月には「町人祭り」という地域総出の祭りがあり、この時に限り、境内に展開する骨董古物業者も周辺に隣接する商店街に分散して出店するということがあった。

境内の露店を眺めていると古着や書画骨董など、後述する京都の露店（東寺・北野天満宮）に近い品揃えであると感じられた。若干、古民



図版8 大須観音骨董市

具が多い気もしたが、出店者は滋賀以東の岐阜や山梨、静岡などの関東勢が目立っていた。また、東寺や北野天満宮に出店している業者も見かけたが、ある業者（中国地方）からは興味深い巡回ルートを教えてもらった。まずは、遠隔の東京（花園神社・富岡八幡宮等の日曜日）から静岡護国神社（毎月最終土・日曜日）、名古屋（大須観音18日）を経て、京都（東寺21日→北野天満宮25日）、大阪（四天王寺21日・22日）など近畿周辺を経由し、在所に帰るというもの。大須はまさしく中間地点ということになるだろうか。

さて、大須観音の境内は大須観音通や仁王門通に直結しており、商店街エリアの西の玄関のような存在でもある。レトロな感覚を残す商店街には世界各国の料理が味わえる店もあり、世界コスプレサミット（2003年以降開催）など目新しい取り組みなど、地域の存在意義を発信し続けている。その中であって、月2回の娯楽を享受する場所として、また地域商店街を活性化させる装置として、大須観音骨董市の役割は大きいと言えよう。

6、京都の露店（北野天満宮天神市・東寺弘法市）

北野天満宮天神市

北野天満宮（京都市上京区馬喰町）は旧官幣中社で、菅原道真とその夫人、および長子の高視を祭神とする。

全国約1万2000社の天満宮・天神社の総本社として知られる。天神信仰の発祥の地でもあり、京都では「天神さん」と親しみを持って呼ばれている。

毎月25日は「天神さんの日」としてご縁日がある。それは、菅原道真公のご生誕である6月25日と薨去された2月25日に由来している。なかでも、12月25日は「終い天神」と呼ばれ、1年の締め括りとして多くの参拝客で賑わう。また、年初の1月25日は「初天神」と呼ばれ、学問の神「菅原道真公」にあやかろうと多くの受験生が参拝することでも知られるが、いつにも増して出店が多く押し寄せる人波は年末年始の風物詩として報道されることが多い。

縁日にもなう露店商の出店は、午前3時頃から未だ暗闇の中で作業が始まるが、搬入のための車両移動や各店舗の配置は前日から場所割りが進められる。何度か、厳冬の深夜に搬入作業を見に行ったことがある。寒い時期にもかかわらず、多くの人手があったことに驚いた。早朝の参加者は参拝者というよりは、リネン・古着やSPレコード、書画骨董や古本、アジア雑貨や古民具などを目当てのディーラー、コレクターが多く見受けられ出店を手伝いながら値

交渉する姿は中世以来の絵巻の市場を見る思いがした。暗闇での値札のない駆け引きはスリリングなもので経験を積まないとなかなか声掛けできるものではない。感と度胸、そして欲が絡んだ商いの原点のような場所である。露店は京都を中心に滋賀、奈良、兵庫、大阪など近畿一円からの業者が目立つ、また北陸関東からの出店もあるが、近年は岡山・広島からの業者が増えていのように思う。

出店場所は境内（参道・駐車場）に留まらず、一の鳥居から国道101号線を渡った路地や天満宮外周の御前通、天神川を渡った平野神社に至るまで、通路の両サイドが露店で覆い尽くされる。この周辺道路にまで及んだ出店状況は長年月をかけて地域との連携（飲食店等の店先を飯店舗として提供するなど）が進み、「天神さん」と愛着を持って親しまれる存在になっていることの証だろう。

北野天満宮社務所によれば全体の出店数は1,000軒と伺ったが、骨董関係は300軒程度ではないかと出店者から聞いた。参道の出店は午前6時から午後9時までで、天満宮外周の骨董ゾーンの出店時間（夜明け前から午後5時頃まで）とは違いがあることもわかった。出店者も直近の東寺弘法市（毎月21日）と競合するケースが多く、骨董好みの参拝者は日を置かずして顔合わせすることになる。東寺が雨天の場合は初出したが、商品が変わっていないと滞留時間も減るわけで、後がない分、値切り交渉も厳しいような気がするのは私だけであろうか。

早朝の目利き客による巡回が落ち着く午前9時ごろから参拝者が増え始めて、正午前後が一番混み合う時間帯となる。晴天の「終い天神」ともなると御前通（図版9）などは身動きが取れぬ人だかりとなることもしばしばである。

最寄りに駅（北野白梅町）があるものの、こちらは嵐電の嵐山からの終着駅のため利用者も限られており、JR山陰線円町からの徒歩以外は、バスによる交通手段が一般的だ。京都にあって、決して交通手段が良いとは言えぬ北野天満宮だが、25日の「天神さん」は周辺の市民や外国人観光客が多いのは勿論のこと、近隣に大学もあるため若い学生や留学生も多く見受けられる。伝統的な生活文化を享受するとともに娯楽や文化交流センターの役割も果たしている。フィールドワーク学習の舞台として格好の生きた教材であるともいえよう。



図版 9 北野天満宮天神市

東寺弘法市

JR 京都駅から西南方向を見れば、ビルの合間に木造の塔が見える。京都人が出張の行き帰りに目にするシンボリックな塔は東寺の五重塔⁹⁾である。

京都市南区九条町にある真言宗総本山東寺は通称、教王護国寺と呼ばれる。平安遷都とともに建立された官寺で、嵯峨天皇から同寺を託された弘法大師空海が密教の根本道場として今日に至っている。創建から約1,200年、平成6年(1994)には世界遺産に登録された。立地的に駅南ということもあり、駅北に集中する史跡に比べて観光客のコースから外れているような気がせぬでもないが、ここには毎月多くの参拝客を集める「弘法さん」の露店市がある。

「弘法さん」(朝市とも呼ばれる)の歴史は古く、鎌倉もしくは室町期には定期的に市が立っていたとも言われる。毎月21日には京都駅八条口から東寺までの途中にも即席の露店が並び、寺へ行くまでに高揚感が掻き立てられる。境内に約1,200軒もの露店が並ぶ様は壮観だ。当日は古物骨董をはじめ、京野菜、地ビール・地酒をはじめ飲食店、占い、人探しの相談所などバラエティーに富んだ露店が展開する。そのなかで古物骨董関係の出店は350軒ほどと聞いたが、その出店場所は南大門を入った金堂までの広場がメインステージで、金堂・講堂の西側一帯がそれに続く。そして、北大門を出て八条通に面する北総門までの直線と洛南高校の南側で交差する通路が主な場所となっている。金堂前広場はテントを張った重厚な店構えの店が多く、品揃えも高額なものが多いのに比して、洛南高校周辺は前述のビタと言われるようなビニールシートを敷いて、直接商品を並べるウブ出し風の店が多い。いわゆる「掘出し物」を物色するコレクターで早朝は独特な熱気がある。この辺りの状況について、昭和30年の記述だが、柳宗悦の興味深い随想があるので紹介しておこう。

何もかも、けじめなく売るこれらの朝市は、私共には大いに興味があった。最も私が始めてその市のことを知ったのは、ようやく大正の終わり頃であるから、もうよい時期は去ってしまった後だともいえる。大正の始めであつたら、更にまた明治に迎つたら、品物はどんなに素晴らしかったかと思える。時代が降るにつれて、物の質は落ちてゆく、「この頃は全く何も出んようになりました」と私共はよく商人から聞かされたものである。実際そうであるに違いない。しかしそれでも出掛ければ、何か一物は手に入った。もともとこの朝市には五時から六時頃の間、手車で品物が運ばれてくるのだが、車が止まるのを待ち受けているのは小道具屋連中で、めばしいものが先ずぬかれてしまう。それに六時頃出かけるのは、そう楽なことではなく、私共が行くの

寺社祭礼を中心とした露店市の今日的形態

は、早くて七～八時頃になってしまう。この市を目がけて集る都民の数も大したもので、天気でも良いと、時には身動きも出来ぬ盛況である。それ故、私共はどうしても二番手、三番手の買い手となってしまふ。しかし有難いことに、道具屋と私共の眼のつけ所に、なかなか喰い違いがあるのである。だから後から出掛ける私達にも、目こぼしの品が相当に恵まれるわけである。

柳宗悦「京都の朝市」

いそいそと早朝に出かけるコレクター達の心境を代弁するものだが、人も物もやはり出会いである。時代が移ろうと、時間が遅かろうとも縁あるところに、それはやって来るのではあるまいか。彼の言う「目こぼし」は未だ健在であると言いたい。

近年、月初めの第1日曜日には古物・骨董に特化した露店市も行われており、通称「がらくた市」(図版10)と呼ばれて人気を博している。通常の21日より海外の観光客や自分の気に入りの商品を目当てにやってくる人が多いようだ。やはり、生活骨董が主であるが、日常品や雑器が多いのが特徴といえよう。21日も含めた出店者の分布は、滋賀県、京都市内はもとより、岡山、広島、名古屋、九州地区と様々で、遠くは関東からの参加者もいた。現在、出店・運営に関しては東寺出店運営委員会がその任にあたっており、ホームページを作成して積極的に催事の告知紹介に務めている。

さて、この「弘法さん」、25日の「天神さん」よりも規模は大きく、恐らく日本一の露店市と言えるものだろう。広大な平地で様々な買物が出来る点では、関西屈指の質を誇る。歴史的に続いたこの平面的な形態が、立面として立ち上がったのが百貨店と言えるのではないか。そう思えるほどの、品揃えとバリエーションに富んだ祝祭空間が「弘法さん」と言えるだろう。時代に合わせて取り組みも変化して行く「弘法さん」は、娯楽の殿堂とも言える場所であり、私の中では京都に出かける理由の上位を占めているのは今も昔も変わらない。



図版10 東寺ガラクタ市

7、大阪の露店（四天王寺大師会）

四天王寺は、推古天皇元年（593）に建立された。聖徳太子が四天王寺を建てるにあたり、「四箇院の制」をとったことが『四天王寺縁起』に示されている。「四箇院」とは「帰依渴仰 断悪修善 速証無上 大菩提所」。つまり仏法修行の道場である敬田院、病者に薬を施す施薬院、病気の者を收容し、病気を癒す療病院、身寄りのない者や年老いた者を收容する悲田院の四つの施仏教の根本精神の実践の場として、四天王寺を建てられたといわれる。これらの施設は、中心伽藍の北に建てられたようだ。いずれにせよ、四天王寺の創建の頃より、貴賤を問わず、人々が群れ集う素地があったと言えよう。以来1400年以上の歴史を刻む同寺は日本最初の官寺であり、和宗総本山にして山号を荒陵山という。境内は日本最古の建築様式とされる四天王寺式伽藍配置¹⁰⁾を備え、「扇面古写経」「四天王寺縁起」「七星剣」などの国宝や多くの重要文化財などが宝物館に収蔵される。このように歴史と風格に満ちた大寺でありながら、地元の人々にこれほど親しみを持って参詣される寺院は他にあるまい。それは、年中繰り広げられる様々な行事が地域の人々の生活に密接に結びついているからであろう。

同寺には、谷町線四天王寺前夕陽ヶ丘駅から数分、JR 天王寺駅からは10分ほどで行ける。いずれも平坦な道のりで、老若男女が無理なく参詣できる好立地だ。縁日のなかでも弘法大師の月命日、毎月21日は俗に「お大師さん」と呼ばれ、境内に露店¹¹⁾が並び、多くの参詣客であふれる。弘法大師は聖徳太子を讃仰し、若き日に四天王寺に詣でて、西門にて入日を拝する日想観¹²⁾を修した。この機縁により毎月21日に大師会としてのお参りが江戸時代より盛んになったと言われている。一方で、聖徳太子の月命日22日も「太子会」として四天王寺の縁日となっており、前日から引き続いて各種露店が並ぶ。



図版11 四天王寺大師会

ただ、21日は東寺の弘法市と同じ日でもあり、古物骨董目当てのコレクターは早朝に東寺、午後から四天王寺（四天王寺は午前8時から午後4時頃まで）と両会場を流す猛者もいる。四天王寺の出店者は大阪を中心に奈良、和歌山、兵庫、山陽方面など西日本の業者が中心である。比較的、ウブ出しと言われるような古物専門の店（図版11）が多いように思うが、近年、やはり古着の店が増えてきた。個人的には

「お大師さん」(21日)に馴染みが深い。前述したように祖父との思い出があるからだ。月参りは勿論のこと、春秋2回の彼岸会には普段出店しない大仕掛けの露店もあり楽しみに連れて行ってもらった。

四天王寺は筆者の実家から自転車で約30分の距離である。まずは、参道で経木(先祖の戒名を書く)を買い、亀井堂で経木流しをしてから六時堂でお参りをする。それからは、気の向くまま境内を散策するのがいつものコースだった。途中、綿菓子を食べたり、おもちゃ屋を冷やかしたり、境内に遍在するお堂をお参りしながら隈なく散策した。毎回通っていると境内の店舗配置も頭に入り、買ってもらおうおもちゃ屋などに目星をつけながら祖父の手を引いたものだ。すでに、小学生の頃から同じ商品でも店によって値段が違うことに気付いていた。これは大量仕入れを仲間内で分ける際に引き取り量によって一点単価の差異が生じたに過ぎないのだが、幼い頃には知るよしもなかった。

一方で、祖父は、磁石による按摩器具(甚だ怪しいものだったが)や薬草、灸の艾などの健康商品をはじめ、ステテコや駱駝のパッチなど衣料品や古道具を手にとっていたように思う。店主とのやりとりや値交渉、「最後にこれも付けといてんか」と言うのが決まり文句で、うまく言い値で買うのではなく「値切るのも相手への礼儀や」と笑いながら言っていたことを思い出す。思い出は尽きないが、「彼岸の中日」へのノスタルジーを語る人がもう一人、小出櫓重の随筆を再度紹介してみよう。

私が子供の時、父は彼岸の中日には必ず私を天王寺へつれて行ってくれた。ある時、その帰途父はこの落日を指して、それ見なはれ、大きかろうがな、じっと見てるとキリキリ舞おうがなといった。なるほど、素晴らしく大きな太陽は紫色にかすんだ大阪市の上でキリキリと舞いながら、国旗のように赤く落ちていくのであった。私はその時父を天文学者位えらい人だと思った。この教えはよほど私の頭へ沁み込んだものと見えて、彼岸になると私は落日を今もなお眺めたがるくせがある。そしてその時の夕日を浴びた父の幻覚をはっきりと見る事が出来る。彼岸は仏参し、施しをなしたとあるが故に、天王寺の繁盛はまた格別だ。そのころの天王寺は本当の田舎だった。今の公園などは春は一面の菜の花の田圃だった。私たちは牛車を立てる砂ぼこりを浴びながら王阪をぶらぶらとのぼったものであった。境内へ入るとその雑踏の中には種々雑多の見世物小屋が客を呼んでいた、のぞき屋は当時の人気者熊太郎弥五郎十人殺しの活劇を見せていた、その向うには極めてエロチックな形相をした、ろくろ首が三味線

を弾いている、それから、竹ごまのうなり声だ、これが頗る春らしく彼岸らしい心を私に起させた。かくして私は天王寺において頗る沢山有益な春の教育を受けたものである。

小出櫓重「春の彼岸とたこめがね」



図版12 四天王寺日想観



図版13 日想観で配られたお札

小出が言うように、私も四天王寺から有形無形の教育を受けたのかもしれないが、どれだけ多くの大阪人が彼岸の中日に思いを馳せたことだろう。西門に沈む真っ赤な夕日は何とも言えぬ荘厳な雰囲気がある。江戸期の谷町周辺に料亭が多かったのもビルが林立するまでの西方への見晴らし、夕陽丘という地名に残る景勝の地であったからに他ならない。滅多に晴天での入日を確認し得ないが、平成29年の日想観（図版12・13）は本当に素晴らしいものであった。見渡せば、露店の只中にいる自分がまさに聖俗の境に立っているような感覚にとらわれる。清濁併せ呑む大阪特有の雰囲気こそ四天王寺の縁日から熟成されたものではないか、と思える瞬間でもある。

まとめにかえて

ここまで、都市部で実施される露店市の実例をみてきた。地元の四天王寺大師会や東寺・北野天満宮は馴染みがあったものの東京、名古屋の催事は今回の調査により初めて行った場所も

ある。いずれも地域に由緒を持つ寺社の祭礼をもとに始められた経緯を持つが、大江戸骨董市（東京国際フォーラム会場）は新たな文化事業として地域交流の場を提供することに成功している。

富岡八幡宮（骨董市）は、江戸三代祭にあげられる深川八幡祭りで有名だが、平成から始まった骨董市がすでに定着している。門前仲町の商店街では開催日に合わせて特別メニューを打ち出した食堂もある。さらに「青空市」なるフリーマーケットも別日に開催されるなど神社の本祭以外でも緩やかな地域連携が進んでいるように思えた。

花園神社（青空市）は、新宿という日々膨張する都会にあって憩いのオアシスとも言える存在になっている。毎週日曜日に青空市を開催しているのも他に例がないことで、それだけ人が集まる商圈であるということの証であろう。西側にはゴールデン街と歌舞伎町があり、多くの作家や芸能人が集う不夜城の街であり、時に、唐十郎の劇団唐組による紅テント芝居が境内で催されるなど文化芸術を発信する実験的な空間でもある。

大江戸骨董市（東京国際フォーラム会場）は、今や東京で最も新しい文化創造の場であろう。都会的な空間を活用しつつ様々な骨董古美術品や民具を手にとって見ることが出来る。以前、調査に行った折には西側にある帝国劇場（ジャニーズ系の舞台時に）へ向かう少女たちが興味深げに覗いていた。気楽に見られるのが露店の良さで、この敷居の低さが新たな文化需要につながるだろう。過去と未来をつなぐ玉手箱のような空間が創出されたと思う。

大須観音（骨董市）は名古屋の中心部で、大須商店街の西玄関とも言える存在である。月2回の骨董市が多くの人を惹きつけるだけでなく商店街の賑わいの中に観音さんがあると感ぜられた。境内周辺の出店など広域的に催し物があるという雰囲気がある。まさしく地域と一体化した催事の好例であると言えよう。

北野天満宮（天神市）と東寺（弘法市）は、京都に位置し開催日が近いこともあり、互いが表裏一体をなす関係にあると言っても過言ではない。なぜなら、出店業者の多くが重なり合うだけでなく、訪れる客もまた同じだからだ。そのいい例が「東寺さんが雨なら天神さんは晴れやで」（その逆も然り）とする密かな競い合いと期待の気持ちがない交ぜになった感覚と言える。いずれも掘り出しのメッカとされ多くの参拝者を引きつけてきたが「昔ほど、ええ物が出ない」と嘆きながら行くことを辞められない魅力が両催事にはあると思う。

四天王寺（大師会）は庶民の寺で、大師会も自由な雰囲気にも包まれた露店市という感覚がある。しかし、今回の調査を通じて、他所の調査地に比して本堂に参拝する人の割合が多いのが四天王寺であったように思う。東京などは特定の露店を最短距離で訪ねて直帰する人が多く、

参拝と催事が分離している傾向があるように感じたのだが、今後、統計を取って確かめてみたいと思う。

前述したように四天王寺には幼い頃から通い続けているため、身置屋があるかもしれないが、見知らぬ人との会話や物の良し悪しの判断など様々なことを教わった。近すぎる、踏み込みすぎる人間関係を愉しむ気持ちと言おうか、人とモノとの垣根のような露店風景をずっと身近に感じてきた。

個人的に正札の百貨店に興味がないのも、ポイント制の家電量販店に魅力を感じないのも、どうやらこの辺りに原因がありそうだ。外見に惑わされず「正味」という掛値抜きの世界に慣れるのは、物心がついた頃からお参りした四天王寺大師会の空気感が染み付いているからであろう。

実施した露店の調査は幼い頃からの思い出を走馬灯のように蘇らせてくれたが、調査対象が都市部ということもあり出店業社や来場者の傾向が重なる場合も多く見受けられた。その上で、出店者の動体分布（地域性と移動性）やグループ特性（四天王寺や東寺、北野天満宮などでは中国地方のグループ出店が確認された）などに興味広がった。今後は、四天王寺のフィールドワークをさらに充実させるとともに全国各地で開催される地域限定の露店市についても目を向けて生きたいと考えている。

本研究は、平成28～29年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究費を受けて行ったものである。

〔注〕

- 1) 口上を述べて商売をする者をいう、てきや仲間の隠語。
- 2) 昭和30年代に実施されていたものを列記している。(中沢誠一郎編著「大阪」参照)
- 3) 佐古慶三(1898～1989)は大阪南久太郎町二丁目生まれ。大阪高商(現大阪市立大学)を卒業後、東京高商専攻部(現一橋大学)を卒業する。専攻は商業史。大阪樟蔭女子大学を経て昭和40年、大阪商業大学教授として迎えられる。彼が収集した商業史資料(佐古慶三収集文書)約3,000点が基幹となり、昭和58年、谷岡記念館に商業史博物館が設置された。
- 4) 香具師は縁日などで興行や物売りをする人。露店商の場所の割当をする人。野土、弥四、的屋などの呼名あり。(薬に関係することが多く、神農を本尊とする)
- 5) 「露店の秘密 常設店と臨時店」『商売打明話 家庭の経済知識』時事新報社経済部編(昭和3年)と秦孝治郎著・坂本武人編(1993)『露店市・縁日市』中央公論社を参考とした。
- 6) 事務局長の高橋氏に会の運営についてお聞きした。「物が古いのはやはり関西で、ここでは江戸趣味の袋物、根付、矢立、鍔など金工作品が海外のバイヤーなどに人気がある。客の好みもあるが、やっぱりここは作家ものが多いねえ」ということであったが、参拝客の様子や天候を見ながら撤収は決めているようで、会は午前8時ごろから午後3時ごろまでの出店だという。
- 7) 厚くて丈夫な木綿の織物で、仕事着や前掛け、半纏などに用いられた。北前船を經由して日本海側や北海

寺社祭礼を中心とした露店市の今日的形態

道などにも運ばれた。

- 8) 同会のホームページで確認したところ、半ブース (W1.8×D1.8m) が6,000円、1ブース (W2.5×D2.7m) 12,000円、1.5ブース (W3.15×D2.7m) が14,000円、2ブース (W3.6×D3.6m) が17,000円 (平成31年1月20日現在) となっていた。東京都心部の駅近であることを考えると割安な参加費と言えるだろう。
- 9) 高さ55メートルは国内木造建築の五重塔 (国宝) としては最高の塔で、寛永21年 (1644) に徳川家光が再建奉納したものである。また、講堂 (重要文化財)、金堂 (国宝)、大師堂 (国宝)、蓮華門 (国宝) など文化財史跡に指定された建物が多い。
- 10) 南から北へ向かって中門、五重塔、金堂、講堂を一直線に並べ、それを回廊が囲む形式のこと。
- 11) 現在、露店数は200軒程度と聞いたが、彼岸会の時はそれよりも減るということであった。出店については大阪神農商業協同組合が祭事の前日などに受付を行っている。
- 12) 四天王寺の西門石鳥居は、古来より極楽の東門にあたると信じられてきた。現在も四天王寺では、彼岸の中日に石鳥居の向こうに沈む夕日を拝し、極楽浄土を観想する日想観が行われている。

【参考文献】

- 杉山博 (1960) 「六斎市」『講座日本風俗史別巻 8 商業風俗』雄山閣 pp.255～257
- 筒井之隆付載「《聞き書き》佐古慶三傳」谷沢永一編 (1983) 『なにわ町人学者伝』潮出版社 pp.124～125
- 秦孝治郎著・坂本武人編 (1993) 『露店市・縁日市』中央公論社 pp.96～104、pp.174～176
- 時事新報社経済部編「露店の秘密 常設展と臨時店」(1929)『商売打明話 家庭の経済知識』寶文館 pp.325～327
- 中沢誠一郎編著 (1962) 「大阪という社会」『大阪』有斐閣 pp.110～111
- 木村助次郎 (1923) 『大坂繁花風土記全』だるまや書店 上19丁 文化11年 (1814) 当時の事例。
- 小出楢重 (1936) 「大阪」『大切な雰囲気』昭森社 pp.72～78
- 柳宗悦 (1989) 「京都の朝市」『蒐集物語』中公文庫 pp.106～107
- 小出楢重 (1990) 「春の彼岸とたこめがね」『小出楢重随筆集』岩波文庫 pp.～106～107
- 「天王寺研究号」『郷土研究 上方』第1巻第3号 昭和6年 (1931) 3月発行
- 加藤紫芳 (1908) 『大阪案内』矢島誠進堂
- 金井新次郎 (1938) 『大大阪市縁日案内』兵頭工八ガキ店

* 本稿をなすにあたり露店市会場で多くの来場者に感想をお聞きし、忙しいなか出店者にも様々な意見を伺うことができた。そして、本調査の機会を与えていただいたアミューズメント産業研究所に対してもこの場を借りて感謝の意を表したい。